

[Table 4.] 省略された人物

		男		女	
		N	%	N	%
省略	父	9	22.5	11	26.8
	母	2	5.0	1	2.4
	本人	0	0	0	0
	他	3	3.5	4	4.7

[Table 5.] 父、母、本人についての描画順序の分析

性	順序	対象	出現数	論理的 期待の数	x <sup>2</sup>	P
男	始	父	6	8	0.34	.90>p
		母	16	8	3.07	.10>p
		本人	3	8	2.63	.20>p
	終	父	7	8	0.08	.95>p
		母	7	8	0.08	.95>p
		本人	16	8	3.64	.10>p
女	始	父	4	9	2.43	.20>p
		母	10	9	0.07	.95>p
		本人	17	9	3.49	.95>p
	終	父	9	9	0	
		母	13	9	0.99	.95>p
		本人	5	9	1.31	.30>p

[Table 2.] 描かれた人物の身体の部分の省略

		男		女	
		N	%	N	%
口	父	1	2.5	3	7.3
	母	1	2.5	1	2.4
	本人	7	17.5	3	7.3
	他	3	7.5	2	4.9
手	父	15	37.5	11	26.8
	母	17	42.5	15	36.5
	本人	17	42.5	10	24.4
	他	29	72.5	26	63.4

[Table 3.] 特殊な表現について

		男		女	
		N	%	N	%
プロフィール	父	0	0	0	0
	母	1	2.5	0	0
	本人	0	0	0	0
特殊姿勢	他	1	2.5	0	0
	父	10	2.5	4	9.8
	母	11	27.5	1	2.4
	本人	14	35.0	1	2.4
他	12	30.0	8	19.5	

## 幼児の観察教育について(第2報)

### 幼児と保育者の描いた蝶の比較

広島女子短期大学

山内美子  
山中和子  
小沼ゆう子

**目的** 蝶は幼児の周辺にいる上美しく舞うので、幼児は非常に興味を懐くようである。男女を問わず描えようと試みたり絵に描いたりする。そこで蝶を中心に多角的に調査をした。

**対象、方法** 蝶：保育者二五〇人に生態を图示してもらい、幼児は二二〇人に蝶を描画させた。絵本：一五〇冊につき昆虫を記載している会社。昆虫は擬人的か写実的か。拡大鏡：園児三名に三対一の割合で与え拘束なく持って遊ばせた。

**集計方法** 蝶：触角二本、目、口、翅四枚、紋、胴体、脚六本か四本を対照とした。拡大鏡：最初に興味を懐く園児とその継続期間、ホスの態度、観るのは何時か、一斉保育後どんな幼児が持つか、何に使用するかを見た。

**成績** 蝶：両者間に有意差のあるものもあるが全体の傾向は同じようである。絵本：昆虫を扱っているのは僅少であり、写実的な絵と擬人的な絵はほぼ同数である。拡大鏡：最初に興味を懐いた園児の継続期間は一週間。ホスの態度は他人に貸さないし自分の観たい時は他人のを奪う。使うのは朝と午後の自由時間だが午後観るのは朝観ない幼児に多い。また花や葉、昆虫、文字、布の織目を観る。紙を焼く。泥棒ごっこ、映画ごっこに使う。

**考察** 蝶について百分率の小さなものは口である。保育者の小なる事は忘却したということであり幼児のは無智な為描けなかったと思われる。蝶に興味を覚え、親近感を懐く最盛期は幼児期と思われる。この時期を逃さず拡大鏡を与え生きた蝶の形態を観察させると記録の保持度が高いと思われるし、科学教育の一助になると思われる。絵本は擬人化した絵より写実的な絵が良いと思われる。

**対策** 生物的方面、物理的方面、生理的方面と他方面に利用し、難しい理屈より正しい形態の構造を把握させ、いかにすれば興味を失わないようにできるか留意したいと思う。

## 幼児画の診断における 浅利説の意義とその限界

立命館大学 守屋光雄

**目的** 浅利自由想像画法を幼児におこなった場合の適中率について検討する。

**結果** ① 浅利らの診断による幼児における適中率は、彼らが、年長児童についておこなった結果よりも低く、発達段階との関連が考えられる。② 浅利らが診断困難としたケースは、錯画や羅列画に多かった。③ ケースによって、高い適中率のみられるものもある。④ 投射指標は幼児においても、比較的適中率が高かったが、顔面投射、体軀投射、その他の何れとみるかについて、診断者間に判定のくい違いがみられた。⑤ 比較的適中率の高かったものとしては、父の象徴としての太陽や、母の象徴としての乗物と、それぞれ

れの色彩言語のように、出現数が多く、指標の判別が比較的容易で、且つ研究がすでに相当多く積みかさねられたものである。⑥ 紫色と疾病障害との関係は、一致度および不一致度高く示唆的であるが、必然的でない。⑦ このように、自由想像法による診断には限界がある。(第一表、第二表、第三表参照)

[Fig. I] アサリ診断法と諸調査との比較

性差	診断		計
	一致	不一致	
男	26 60.46%	24 52.18%	44
女	21 51.21	17 39.54	43
計	46 52.88	41 57.12	87

[Fig. II] アサリ診断指標別にみた頻数比較 (一致、不一致一覧表)

性差	指標			形			射		
	色		彩	態		疑	投		射
	一致	不一致		一致	不一致		一致	不一致	
男	20 51.29%	17 62.96	3 100.0	9 50.0	3 27.28	1 50.0	2 18.18	7 70.0	1 33
女	19 48.71	10 37.03		9 50.0	8 72.72	1 50.0	13 81.82	0 30.0	1 66
計	39 (56.52)	27 (39.13)	3 (4.33)	18 (57.07)	11 (36.13)	2 (6.8)	15 (62.5)	7 (29.19)	2 (8.17)

註 ( )の%は全指数の全頻数に対する%である